

# コミュニケーションとしきたり

宍倉 啓子

はじめに

小児科医になって来年で三十年になります。初めて受け持った患者さんは、おかつは髪のかわいい小学生でした。無事に完治して退院する時、新米の私にていねいにお礼を言って下さったのを思い出します。私の大学の小児科学教室は小児神経疾患のパイオニアで全国からたくさんの方が入院予約していました。神経系の病気には完全に治すことができない疾患がたくさんあります。ですからその後私は診断をつけ

することも治すことも難しいたくさんの神経疾患の患者さんに出会いました。神経疾患を持つ子どもの多くは言葉や運動発達が遅れ、「障害児」という概念で捉えられています。医師の立場からしますと、病名はさておいてその子の機能の程度から軽度、中等度、重度と分類されるのはいかなものかと考えた時期もありましたが、最近はこちらがいます。病気が何であれ、その子にとって大事なのは毎日の生活なのであり、病名は底辺の大事な要素ではあるけれども生活のごく一部に過ぎないと考えるようになってからです。今までに様々な種類の障害を持つ子どもたちとそこでご両親に出会いました。障害児は自分の気持ちや要求を他人に伝えることが難しい場合が多いので、幼稚園や学校にわが子を送り出す時、ご両親はおそらく大変な不安を持たれます。不安の最大のポイントは「子どものことをわかってもらえるかどうか」という点にあります。つまりうまくコミュニケーションがとれるかどうかという点です。今回はこのコミュニケーションについていろいろな角度から考えてみたいと思います。

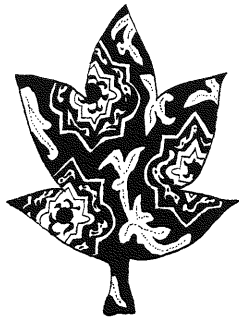
### 障害児とコミュニケーション

重症心身障害児のことを「はだかのいのち」と呼んだ医師がいます。身体と知能の障害が大変重いため、生活のすべてに介助が必要ですから、外部からの心地よい刺激も不快な刺激も丸ごと受け止め、自分で制御することができないからです。母親はい

つもそばにいて介護していますから、表情や声のトーンの微妙な変化、力の入れ方などで、空腹であること、身体がづらいこと、うれしいこと、悲しいこと、やってほしいことなど様々な要求を理解します。けれどこれらの微妙なサインは身近な母親や家族以外にはなかなかわかりません。そして母親から要求の内容を伝達してもらい、初めて「ああそうなのか」と理解できるといった次第です。それでは母親からサインの内容をマニュアル的に教われればコミュニケーションはとれるでしょうか。答えは否です。何故ならこのような微妙なサインは、信頼関係ができて本人の気持ち丸く穏やかでないとして出てこないからです。そして信頼関係を作るには、あせらず、こちらも心を丸くして、お互いが存在する空間を大事に育ててゆくことにあると思います。たとえ返事が返ってこなくても「お日様がまぶしいね」「この花はよいにおいがするね」などと同じように感じることをできる単純なことを話してみることから始まるのです。

### 現代つ子とコミュニケーション

どんな子どもも生まれた直後は「はだかのいのち」です。泣くことで自分の要求を表現するしかないのです。赤ちゃんが泣くのはミルクが欲しい、お



むつがぬれたといったわかりやすい要求だけではありません。特に乳児期早期にはこれといった理由があるわけでもなく泣くことがあります。そんな時、「よしよし、大丈夫」とまず泣いていることを受け止められるのは育児に慣れたお母さんですが、「どうしたの、何なの？」と泣いている理由を探しだせないと途方にくれてしまうお母さんは新米です。そしてここでもお母さんと子どもの間の空気があたたかく、丸く存在することが大事です。子どもが大きくなれば言葉による母親とのコミュニケーションがでてきますが、この場合も同じことが言えます。めまぐるしい現代の時間の流れの中でも、母と子のゆったりとした時間の流れは昔から変わりようがないはずで、最近の仕事を持つ女性も増えていますが、仕事の有無にかかわらず、母と子のこのような時間の共有は何事にも増して大事なことであります。生活が便利になった分、ちょっとした心遣いでこのような時を持つことを心がけて欲しいと思いますし、保育者はそのように助言して欲しいと思います。

現代っ子はコミュニケーションがへたであると言われます。何故でしょうか。最近、子どもの発達とテレビ、ビデオなどメディアの関係が話題になってきています。テレビやビデオに子守をさせていると、子どもが自閉的になると言われ始めました。とくに乳児期から幼児期早期までにお母さんとの良いコミュニケーションがなく、テレビやビデオ漬けになることへの警鐘が鳴り始めています。これはメディアとの一方

向性の脳への入力では健康な脳の発達ができないことがわかり始めたからです。コミュニケーションは人にとって大きな経験です。指先を使うことが脳の発達に良い刺激を与えるとしても、技術を習得することが良いものではありません。作ったものをお母さんに見せる、あるいはおじいさんのために作ってみるというように、創作意欲のきっかけに自分以外の人が想定できたら素晴らしいではありませんか。そして本人に戻ってくる「ありがとう」はこの「自己」評価を高め、未来への栄養となるはずです。

しきたりは古い概念のようですが、しきたりを守るには親類や近所の方とのコミュニケーションが必要とされます。そのような意味で古いしきたりがなくなつてゆく日本において、人と人とのコミュニケーションを守るため大人が良い伝統を次代へつなげてゆく努力をすることが今求められていると思います。

### おわりに

人の「知識」は増えたけれども「知恵」は変わっていないと言われます。「うまれたときはまるはだか、死ぬときはそれも捨ててゆく」——相田みつおさんの言葉です。こどもを育ててゆくときに、思い出したい言葉であると思います。

(社会福祉法人「訪問の家」 朋診療所・東京女子医科大学)